

YUIMA NAKAZATO

Couture Collection Autumn/Winter 2022-23



YUIMA NAKAZATOは2022年7月7日、12度目のオートクチュール・ウィークへの参加となる2022-23年秋冬コレクション『BLUE』を、パンデミック後の初のパリでのショーとなった前回に引き続き、現地でのランウェイ・ショーを通じて発表いたしました。

クリエイティブ・ディレクション: YUIMA NAKAZATO

ヘアメイク: 計良宏文 for 資生堂

スタイリング: Robbie Spencer

音楽: 坂本 龍一、Senjan Jansen

紙の彫刻『BLUE』制作サポート: セイコーエプソン株式会社

※この彫刻は、中里が描いたA4サイズの地球の絵画を、約200倍に拡大し、紙に印刷し、空間に配置した。

使用後の作品はEPSON社の技術によりリサイクルし、全て別の用途に使われる。

デザイナー・メッセージ

この半年間、インターネットを通じて世界中から飛び込んでくる様々な事象に心痛め、右往左往し、そして、どうすることもできない無力感に苛まれながらも、そっとスマートフォンを見るのを止めることしかできなかった。

ただ、何かを創る手だけは止めてはいけないと、紙とペンでひたすらに絵を描き、粘土をこね、古い布を裂いて布を織り、手で染めてみた。デジタル化が急速に進む時代の流れに逆らうように、自らの手で試行錯誤し創り出すことに安心感を抱いたのかもしれない。

古来人々は、どうしても解決できない問題が目の前に現れると、化身たちに答えを求めていたようだ。ある少数民族では、鳥は神の化身であるとし、上空から俯瞰で我々人間を見下ろしながら、鳴きながら様々な危機を人間に知らせてくれるという。

シャーマンという存在もまた、別の世界とこの世界を繋ぎ、我々の目には見えない「何か」を伝える存在だった。彼らは、今この時代において、どんなメッセージを紡ぎ出し、私たちに届けるのだろう。そんな想像をしながら、日々の作業に没頭した。

ふと、このコレクションの色を何色にしようと考えた時に、青い色をつけたいと思った。地球の青である。空や海は青く見えるが、それは現象として青いだけで、海の水に布をつけても青くは染まらない。目には見えているのに、まるで存在していないかのような不思議な存在なのだ。私は、青い服を纏うということは、化身たちが私たちに届けるメッセージを纏っているような、

そんな感覚になれるのではないかと考えた。

最後に、このコレクションは、役割を与えられなかったデッドストックの素材を集めて制作した。倉庫に眠ってしまう理由は、傷があるものや、多く生産してしまい余ってしまったものまで、様々である。

これらの素材は、ものとして素晴らしいにも関わらず、一般的にはなかなか価値を見出しにくい。

しかし、視点を変えれば、物事の善悪は入れ替わり、全く別の物に変化することがある。

価値が付かないものから、人が美しいと感じるものを創り出したい、そんなチャレンジをしてみたいと思ったのだ。

東京のビルの隙間から見える青空から、私はまだ見ぬ青い地球の姿を想像し、そして、祈るように、このコレクションを創っていった。

中里唯馬

衣服の未来を豊かにするためのアクション

動的であること

生物の体は、絶えず新陳代謝を続けている。衣服が、人間の体の一部であると捉えるならば、変化できる状態が理想なのではないか。これは、長らく中里が向き合ってきたテーマの一つである。その答えを見出すヒントは、着物にあった。着物には完成形が存在しない。修繕を繰り返し、袖を交換し、つぎはぎをする。帯の位置を変え、裾の長さを内側に巻き込むことで、様々な身長や体型の人が着ることができる。常に変化するということが軸にある着物は、中里が目指す動的なデザインの哲学を構築するインスピレーションとなった。本コレクションの衣服は、様々な動的な要素が組み込まれている。

TYPE-1

YUIMA NAKAZATO が開発する衣服のプロダクションシステムTYPE-1は、針と糸を使わない特殊な付属により衣服を組み立てるため、何度でも繰り返し素材同士を付けたり外したりすることができる。そのため、一人一人に合わせてデザインを変化させる事で、1点物のデザインを多くの人に届ける事ができる。また、劣化した部分のみを交換し、長く使い続ける事ができ、また特別な技術がなくても、誰でも服を作る事が可能なため、様々な人が生産者になることも叶える。着る人と作る人の多様性を実現するシステムである。

長方形のパターン

全ての生地は長方形で作られている。衣服の型紙を長方形で作ると、生産時に生まれる生地ロスをゼロにすることができる。このコレクションでは、100%ではないが、可能な限り長方形でパターンで制作することを試みている。これは、着物が長方形のみで作られている事にヒントを得たものである。長方形は、人間の身体とはかけ離れた形状であり、誰の体にも合わないが、一方で、誰の体にも寄り添うことができるという、余白のある形状をしている。また、本コレクションでは、様々な技術を組み合わせることで、西洋のテーラード技術のように、人間の身体に添わせるための試みを行っている。

Biosmocking

日本のバイオ・スタートアップ、Spiber社が生み出した人工合成タンパク質、「Brewed Protein™」の中で超収縮（形状変容）する特徴を持つテキスタイルを、デジタルファブリケーションにより精密にコントロールすることで、生地を自由に變形させる事ができる技術。本コレクションにおいては、藍染や漆、また絞りなど日本の着物文化を支えてきた伝統的な技法と融合することで、これまで課題であった「生分解性の向上（これまでは石油由来のインクが必須であった）」と「形状の保持と柔軟性の両立」を実現し、Biosmockingの新たな側面を見出すことに成功した。

ポリエステルなどの石油由来の素材は、熱加工による形状記憶が容易であるという利点と、天然染料での染色が困難であるという2つの側面があった。Brewed Protein素材は、天然染料で染色が可能であり、Biosmockingにより形状を記憶することができる。本コレクションの制作を通して見出した新たな技法

は、天然由来繊維と石油由来繊維の双方の特徴を合わせた新しい表現を可能にした。これは、Brewed Protein素材の新たな1ページとなるだろう。

手仕事への尊重と継承

桐生の裂織、徳島の藍染、京都の漆、桐生の横ぶり刺繍など、日本の着物文化を支えていた伝統的な手仕事を、積極的にデザインに取り入れ、職人の方々との共同研究を通して、伝統技術を未来へ継承するヒントを共に導きだすための実験的な試みに挑んだ。

余剰在庫の活用

本コレクションは、衣服を生産するメーカーから生地を生産する企業数社に問い合わせ、余剰の生地(デッドストック生地)を集め制作を行った。使用用途が決まっていないまま倉庫に眠っているものから、生産時に傷が入ってしまい販売が難しいものまで様々なものが集まった。

これらのストックは価値を見出しにくいいため、いずれ破棄されてしまう可能性も高い。

この取り組みは、市場では価値が付きにくいものに対し、見方を変えることで価値あるものに变化させる試みである。

単一素材での物作り

衣服の処理施設や、リサイクルセンターに足を運び、家庭ゴミとして手放された衣服や企業の余剰在庫がどのように処理されているのかを目の当たりにし、衣服を設計する時点でできる限り破棄される後の、衣服の最終到達点を意識してデザインするかが、いかに重要であるかを学んだ。

本コレクションで使用する素材はできる限り1つの素材でできているものを使用し、そして異素材同士を縫い合わせることもできる限りしない設計にすることで、リサイクルしやすくなり、また衣服の焼却・埋め立て率を下げるよう試みている。

手書きへのこだわりとデジタルプリント

今シーズンも、何十枚ものデザイン画と、頭の中にある抽象的なイメージを可視化するために紙とペンで絵を描いた。その繊細な手書きの質感を、できる限り損なわずに生地に印刷するため、デジタル捺染技術を使用した。従来の捺染工程は、刷版の洗浄などに膨大な量の水を使用しなければならないが、デジタル捺染、特に今回使用した顔料インクを用いたプリント工程は、水の使用量を大幅に少なく印刷することができる。

デザイナー・プロフィール

1985年生まれ。2008年、ベルギー・アントワープ王立芸術アカデミーを卒業。2015年に「株式会社 YUIMA NAKAZATO」を設立。2016年7月には日本人として史上2人目、森英恵氏以来となるパリ・オートクチュール・ファッションウィーク公式ゲストデザイナーの1人に選ばれ、コレクションを発表。その後も継続的にパリでコレクションを発表し、テクノロジーとクラフトマンシップを融合させたものづくりを提案している。また自らが発起人となり、2021年7月より、未来を担う次世代のクリエイターのためのFASHION FRONTIER PROGRAMを創設。オートクチュール・ファッションウィークを通じて最先端のファッションを提案しながら、社会的課題にも取り組む。

Information

Instagram official account
<https://instagram.com/yuimanakazato/>

YUIMA NAKAZATO official website
<http://www.yuimanakazato.com/>

YUIMA NAKAZATO Press inquiries
press@yuimanakazato.com
afumi_info@afumi.co.jp
[KCD Paris bize@kcdworldwide.fr](mailto:KCD_Paris_bize@kcdworldwide.fr)

YUIMA NAKAZATO | Press Release